

②陸域生態系の予測・評価に関する意見

分類	主な意見の概要	事業者の見解
陸域生態系	<p>・着工から工事開始直前までを「工事の実施」とし、供用後を「土地または工作物の存在と供用」と区切るのが普通ですが、「土地の改変と緑地の消失」の事業行為を、セッカでは「工事の実施」として扱い、カムリワシでは「土地又は工作物の存在と供用」として扱っており、混乱をおこします。</p>	<p>飛行場の存在による影響については、カムリワシ、セッカとも「土地または工作物の存在及び供用時」の項で取り扱っています (p6-12-217、p6-12-229)。特にセッカについては、工事の進行段階ごとの移出と、緑化による生息地の回復とともに再移入するという予測をしており、造成等の一時的な影響と捉え、「工事の実施」時にも記載しました (p6-12-205～209)。</p>
	<p>・空港予定地とされている地域周辺の広い地域を念頭に置いた影響評価が必要。風当たりの変化、乾燥の度合いの変化、水はけ等水系の変化などが考えられ、物理的にも現在と同じ状況であるとは考えられない。空港予定地とされている地域の周辺はかなり広い地域を念頭に置いた影響評価が必要であると考えられる。</p>	<p>風当たり、乾燥の度合い、水はけ等の水系の変化については実施区域だけではなく、周辺区域についても考慮し、微気象の変化による陸上植物の生育環境の変化、コウモリ類のねぐらの質的变化(地下水)などについて予測評価を行っています。</p>
	<p>・工事そのものによる影響への配慮が必要であるため、希少種への影響が懸念される場合には、影響を最小にするため一般に行われている工事より長い工期を設定して対象範囲の小部分ずつを時間間隔をあけつつ行ったり、工事を中断する時期を作ること等の工法を検討したりといったことが可能であるかどうかの検討も望まれます。</p>	<p>工事工程上の配慮として、繁殖期および繁殖箇所周辺を避けて工事を行なうことといたします。また、土工事の施工範囲は小区画に区切ることにより、一度に広範囲の生息場所が失われることがないようにいたします。</p>
	<p>・何万年何千年を経て固定化されてきた自然環境で土壌生態系や豊かな森林とサンゴ礁や魚類が一体となって共存共栄を保全してきたのであってその一角が破壊されることは即全体の破滅に直結することは今更論を待たない。「工事直後の植栽」などの保全措置は空手形であることを肝に銘じていただきたい。それは工事に伴う動土・切土・盛土によって土壌生態系が破壊されるからである。</p>	<p>土壌動物調査結果はp6-12-187に示しています。事業実施区域内となるゴルフ場やカラ岳の草地、周辺域のカタフタ山の樹林地、海岸林、二次林等、多様な環境に生息する38目の生物を記載しています。 環境保全措置として、現地の表土を活用し、植栽土壌として利用する計画であり、また、滑走路周辺や法面植栽は可能な限り現地の植物を利用し、現存する植生の回復を図ることにより、現況と同等の土壌生物群集が早期に復元するものと考えています。</p>
	<p>・航空機との衝突による影響への対策として、爆音等による対策を講じているが、爆音等によるカムリワシの営巣に対する影響やコウモリ類に対する影響がある可能性があるのに、その予測がされていない。</p>	<p>現空港においても、通常一般的に用いられている対策はとられており、新石垣空港においても同様の対策がとられることとなっています。 カムリワシの営巣地であるカタフタ山・タキ山までの距離は約1Km離れていることや、小型コウモリ類は日中は洞窟内に生息していることを考慮すると、上記の対策によるカムリワシの営巣やコウモリ類への影響は小さいものと考えています。</p>